木下杢太郎の欧米体験(2)

Mokutaro Kinoshita in America and Europe (2)

鈴木秀治

SUZUKI Hideharu

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail:hsuzuki@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

Mokutaro Kinoshita (1885～1945) was a doctor, but, on the other hand, wrote many poems and novels, and also painted. He went to America and Europe for medical study and was given a great stimulation by foreign culture. I am engaged in consideration of the influence which these experiences in America and Europe had on his work.

VI. フランスにおける研究生活と芸術への思い

フランスはパリで腰をすえて研究生活に入ったことにより，今回の留学がようやく本道に入ったといえよう。なんといっても，医学研究がその一番の目的であった。短期間だったがアメリカのフィラデルフィアで研究生活を送った以外は，どの土地も杢太郎は旅人として訪れた。パリに到着してからの3ヵ月も，旅人の延長線で暮らしていたに過ぎない。医学研究に着手してはじめて，留学者として足が地に付いた毎日を送ることになった。

1922（大正11）年1月下旬パリで研究開始してから1924（大正13）年5月にパリを引き上げるまでの2年4ヵ月の期間，もっとも長く滞在したのがフランスであった。フランスでは研究の根拠地としてパリのほかにリヨンを選んでいる。1923（大正12）年1月から4月までエジプトとイタリア旅行をしている。これは研究旅行ではなくて，いわゆる観光旅行であった。また，1923年（大正12）年8月から5ヵ月ほどベルリンに過ごす。最後にスペインとポ

ルトガルを訪れたわけであるから，この留学はアメリカ滞在も含めて，移動が多いことが特徴である。

さて，フランスで研究生活を始めたのだから，とりあえずそれに専念すればよかったはずである。昼は医学研究に従事して，残った夜の時間で自分のやりたいことをすればいい。師である森鷗外は生涯にわたって生活と芸術を両立させた。その二次元的な生き方を学べばよかったのである。とはいっても，これは容易な道ではなく，鷗外のような天才が努力してはじめてなしとげられる仕事であった。杢太郎は中年になったとはいえ，まだ30代後半で文豪のようには生活を律することができなかった。

フランスで研究生活を始めた頃に書かれた「大寺の前の広場」から二つの文章を引用しておこう。

> わたくしはもはや数数の不思議な経験もアヴァンチュウルも望みはしない。わたくしの道はもう定まってゐる。

「わたくしの道」とは医者として学問の世界で生きることである。杢太郎はこのように覚悟を決めているようであるが，そのあとの文章で，医学だけでは満足できない気持ちを次のように書いている。

> 夜，旅舎に帰り，そしてわたくしは長嘆した。神は何と思って，わたくしにこんなに，同時にいろいろなものを愛する心を賦与してくれたことかと。（春寒寂しき雑草の廃園――）／たとえば，好きなギュスタアヴ・モロオを研究するだけでも一二年はかかる。フランシスコ・シャビエルの伝記になれば四五年をたやすく過ぎる。道は繁く，命は近い。／わたくしは毎日実に過労する。巴里はいろいろな文明の果実が集中してゐるから，実に出のある都会である。人の言ふが如く巴里は快活で面白い処かもしれない。わたくし自身にとっては実に重く悩ましき世界である。

この時点で関心のあったテーマを杢太郎は二つあげている。19世紀末象徴派の画家ギュスターヴ・モローは，現代日本でもよく知られたフランス画家の一人である。戦後の日本でも何回かモロー展が開かれており，パリにあるモロー美術館を訪れる日本人も多いと聞く。しかし，大正11（1922）年の日本においては，モローの名前はまだまだ浸透していなかった。ヨーロッパの19世紀末をもっとも体現した画家に目をつけていた杢太郎は，まさに慧眼の士というべきだろう。

しかしながら，モローについては1冊のモノグラフを上梓できず，「オルフェエ」という短文しか残せなかった。これは『世界美術全集』（平凡社）の一冊の「図版解説欄」に載せたも

のである。これがモローについて書いた文章のすべてというのは，さびしいかぎりである。

> 人この閑寂なる公堂（モロー美術館）に詣ると，開門忽ち妖気の身に逼るのを覚える。渠が造形の技術は確実で，その古伝説を画くに用ゐる小道具の類は考古学者的の鑑定眼を潜ってゐる。そしてその現はす所は何であるかと云ふと，妖艶，邪淫，異香，楽欲，獣身の妍女，血紅の宝玉……凡て所謂悪の華の美である。

この「オルフェエ」は名文で，短い文章でモローの芸術を要約している。私たちはモローについてもっと杢太郎の批評を聞いてみたかった。杢太郎には一種の完璧主義があり，研究対象について独自の視点をもてないうちは，文章を書くのを自ら禁じていた。モローの場合も例外ではなかった。

杢太郎は帰国後，つぎつぎとキリシタン研究を発表したのだが，フランシスコ・ザビエルに言及することはあっても，その伝記を完成することはできなかった。ただ比屋根安定著の『東洋の使徒聖サビエル伝——日本基督教史序説——』に短い序文を寄せているばかりである。これにしても，ザビエルの故郷に参詣したという理由で自分が序文を求められたのは当を得ていないとことわっている。ここでは，イギリスで再燃した南蛮熱がフランスでもさめていないことに注意しておこう。このキリシタン研究こそが，欧米留学がもたらしたもののひとつである。

VII. フランス生活の現実と書物の購入

ここで主として書簡を手がかりとして，杢太郎がフランスに到着してから研究生活を始めた頃に，何を考えたか，どう動いたかを見てみよう。すこし時を遡ってフランスに到着1ヵ月目に正子夫人に宛てて書かれた手紙（1921（大正10）年11月27日付）をとりあげる。パリで最初の1ヵ月で何にどれだけ金をつかったかが項目別に書かれている。

それによると，総額が約6000フランのうち一番額が大きいのが書籍費で約1000フラン，ベルリッツのフランス語学校30回分が500フラン，フランス語教師2人分で200フランとなっている。ホテルの料金が合計5週間で，800フラン＋800フランで1600フランである。その他には，冬に備えて購入したコートが1着で600フラン，ズボンが1着で250フランである。さほど高価ではないが，マネの鉛筆画2枚を500フランで買い求めていることが注目を惹く。

ホテルの宿泊代と食費を別にすれば，書籍費が多いことに気づく。杢太郎の留学の目的のひとつは，自分の関心のあるテーマについて洋書を求めることだった。それについては同じ手紙に次の言葉を書き残している。「本さへ買はなければいくらでも安くくらせるが本を買はなければ何の為に西洋へ来たか分からなくなる。本の購求を禁止することは出来ぬ。」

どのような種類の本であったかは手紙にも日記にもはっきり書かれていないが，専門の医学書を別にすれば文学・芸術関係やキリシタン文献だったろうと推測される。もともと医学書は高価であり，古本でしか求めることのできないキリシタン文献は稀覯本であり，さらに高価なものである。杢太郎が本の購入費にこだわったのも無理が無い。

ここで思い起こされるのはイギリス留学時に，夏目漱石が鏡子夫人に宛てた手紙の文句である。イギリスでの漱石はつねに留学費が少ないことを嘆いていた。そのために書物も十分に買い求めることができないと漏らしていた。1900（明治33）年12月26日付の手紙に次のような一節がある。

> 当地にては金の無いのと病気になるのが一番心細く候病気は帰朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致し候［中略］今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成（なるべく）衣食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候。

この手紙を書いたとき漱石は満33歳で一児の父であった。また杢太郎は満36歳でやはり一児の父親となっていた。両者はともに30代でヨーロッパに留学しており，夫人に宛てた手紙はおのおのロンドンとパリで生活を始めて間もないころに書かれている。当地でなるべく多くの書物を買いたいという両者の言葉には類似点があり，金銭にこだわる点でも両者は似ている。こんな共通点があるものの，文学者としての経歴はずいぶん異なっている。漱石はまだ文学者として出発していなかったが，杢太郎は若くして詩人として認められ，戯曲や小説さらに文芸批評や美術批評などを数多く発表していた。

Ⅷ. 夫人との不和と結婚観

正子夫人宛ての手紙をとりあげたついでに，杢太郎の結婚観についてふれておきたい。次姉きんは神戸の河合浩蔵に後妻として嫁いでいた。この河合浩蔵は建築家として名前を知られた人物だった。その先妻の長女である正子と杢太郎が結ばれたのである。1917（大正6）年8月のことだった。この結婚は見合いによるものであったが，当時見合い結婚はごく普通のことであり，杢太郎もそれに倣ったものである。

明治の文豪夏目漱石と森鷗外もまた見合い結婚であった。鷗外は生涯に二度結婚しているが，いずれも見合い結婚である。二人はその作品の中でこそ近代的な恋愛を描き出したけれど，自らは恋愛から結婚に進む道筋をたどらなかった。ところで杢太郎の結婚は，文豪の二人とも異なるし，通常の見合いともいささか違っていた。その辺のところを杢太郎自身が説明している夫人宛の手紙を二つあげておこう。いずれもパリ滞在の初期に書かれたものである。

お前の結婚当時お前はまだわかく，結婚の事は凡て河合家と小生とで決定してお許の心などは誰も始めから問題にしなかったのだ。これは，天理教は知らず，西洋風の倫理学からいっても甚だ悪いことで，小生も今になって後悔してゐる。(1922（大正11）年1月15日付)

己はお前の両親殊にお前のお父様をば愛してゐる（何故となれば，お前は唯両親のいひ付けで己の処に嫁に来た丈なのだが，お前のお父様は，是非己でなければいけなかったのだ)。若しこの愛がなかったら，いくらお前が大家のお嬢さんでも，己はお前と結婚しはしなかったらう。己はお前のお父様に対する愛情にほだされてお前と結婚した。(1922（大正11）年3月14日付)

手紙から推察すれば，河合浩蔵は娘の結婚相手として杢太郎が最もふさわしいと判断したのだろう。結婚は河合家と杢太郎の間で取り決められて，正子の意向は最初から問題にされていなかった。見合いで結婚する場合でも，相手の顔ばかり見るのではなく，その人間性を読み取ろうとするものである。父親に対する愛情ゆえに娘と結婚するというのは筋違いというものであろう。いくら父親のことを愛しているからといって，実際に結婚する相手は娘なのだから，その気持ちをないがしろにしていいはずがない。なるほど杢太郎は自分の非を認めてはいるが，事態をさほど深刻に受け止めてはいない。結婚に関して杢太郎は真剣さを欠いていて，明治時代の漱石や鷗外よりも後退している。

最後に，この2通の手紙が書かれた時期は，杢太郎と正子との間に大きな葛藤があったことを記しておこう。夫人は天理教の信者であったこと，夫人は大田正雄（杢太郎の実名）の姓を河合に代えてほしいと願ったこと，今度の洋行に際して杢太郎は夫人の両親に資を仰いだこと，これらを主な誘因として夫婦の心はぶつかりあった。いつもは冷静な杢太郎も次のようにかなり激しい言葉を夫人に投げかけている。

然しこの事は感じられる。御許が天理教になってから御許は段段と俺の心から離れてゆくことを。(1922年1月15日付)

いつもお前の手紙は己を腹立たせるが，(おれはいつもお前の手紙を見てはてな，これがおれの女房から来た手紙だらうか。誰か他人から来たのぢやないかと思ふことがある。)(1922年3月14日付)

夫婦はパリと神戸に離れて，結婚以来最大の危機に陥っていた。どうしても理解しあえない状態に杢太郎はいらだっていた。その後の展開は，正子に宛てた手紙がとぎれていてはっ

きりしない。残念ながら3月24日付の手紙から11月27日付までの8ヶ月間は夫人宛の手紙は残っていない。その間まったく音信不通だったとは考えにくいので，その間の手紙は失われてしまったと考えられる。11月27日付の手紙には激しい言葉は消えているので，この8ヶ月間で二人はなんとか危機を乗り越えたことがわかる。

夫婦の葛藤がどのように終息したかをわずかな資料から判断すると，三つのことがわかる。一つ，杢太郎は大田姓を河合姓に代えることをかたく拒絶した。二つ，夫人の両親の意向を汲んで長男正一を河合家の養子にすることに同意した。これは杢太郎にとっては大きな譲歩であった。三つ，3月14日付の夫人宛手紙には「お互の誤解や，お互の勘違ひを防ぐ為に今後河合家からの送金は中止して貰はう」と明言したものの，金策の当てもあまりなくて兄賢次郎に送金を頼んだりもしたが，結局は前言撤回して義父の河合浩蔵に洋行費を仰ぐことになったと推定される。

医学研究に精を出そうと思っても，夫婦の不和や河合家との関係さらに留学費の問題など頭をわずらわせることが重なり，仕事に集中するにも苦労があっただろうと思われる。杢太郎のフランス留学はその最初の1年目から順風満帆というわけにいかなかった。

IX. 杢太郎とヨーロッパ理解

杢太郎が本当の意味でヨーロッパに向き合ったのは，フランスのパリに到着してからのことである。若き日からヨーロッパに関心をいだき，ヨーロッパ（とくにドイツ・フランス）の文学を学び，その影響も受けながら詩，戯曲，小説を書いた。ヨーロッパは詩人杢太郎の源泉の一つであった。杢太郎にしてみれば，パリはヨーロッパ文化の中心であった。だからこそ，今回の留学の根拠地にパリを選んだわけである。

杢太郎はパリ（あるいはロンドン）でさまざまなヨーロッパ文化の過去と現在に出会った。そのうちのいくつかは理解し感得できるものだった。けれども，意味がわかって十分に味わうことが難しいものも少なくなかった。そこのところを「巴里日記」で次のように書いている。

> 一体西洋では中中物が頭にぴんと来ない。ウインザア，ヴェルサイユ等の宮殿でもとんと得心出来なかった。パリッシイの陶器，中世の金細工，玻璃細工の如きでも我我は浮かぬ顔をして其の前を通る。李王家の博物館で，ははあ，ははあと心を駭(おどろ)かすやうには行かぬ。

ヨーロッパ文化の精華であるウィンザー城やヴェルサイユ宮殿を見学しても，そのよさがわからない。パリシィの陶器，中世の金細工，ガラス細工を見せられても，その美を味わえない。それらの歴史的・文化的根拠をよく知らないからである。だから浮かない顔になるの

も無理はない。ところが，朝鮮の李王家の博物館ならば，その宝物のよって来たるところを知っているので，その美に心うたれて「ははあ，ははあ」と納得するのである。

これは現在でも，海外旅行をするツーリストに当てはまる言葉である。彼らはどこの国に行っても必ず観光名所を訪ねる。ガイドの説明を聞きながら名所を見て歩く。説明を聞いたので何かわかったような気になるが，本当は何もわかっていない。歴史的・文化的背景をよく知らないからである。それでも帰国してから，名所について人にひとくさり話をして聞かせるのである。

それでは，歴史的・文化的根拠に対する知識の少ない文化に対して，どのような態度を取ればいいのか。まずは知識を増やし環境に慣れなければいけない。その問題について杢太郎は自分の体験を通じて次のように記している。

> 兎に角知識と環境とに馴れなくてはどんな佳いものだって身にしみはしない。我我は碌碌支那学はしないが，支那の古文明を味ふことが出来るだけの環境を我我の祖先が遺して置いてくれたのである。中学以来の外国語教育で西洋文化の真相がおいそれと分かったらたまらない筈である。わたくしにとっても，印象派なら分かり，希臘古彫刻やルネサンスの作品にも段段と日が明いてくるのは，大学生の時に，毎日，弁当をこしらへて貰って，学校へゆくふりをして，図書館へ通ったおかげである。(「エンゲン湖畔」1922年8月4日・記)

私たち現代の日本人は十分に中国を勉強しているわけではないが，私たちの祖先が中国学の蓄積を続けてくれたおかげで，中国の古代文明を味わうことのできる環境が整っている。だから博物館で中国古代文明の遺産を目にすると，頭にぴんとくるのである。それと同じことがヨーロッパ文明についてもいえるためには，ヨーロッパについての知識を増し，ヨーロッパを根底から把握する努力が必要である。

あくまでも杢太郎は自分に対して正直であった。たとえ名高いヨーロッパの文物であろうと，自分がよくわからない場合，直覚で把握できない場合は，それを素直に認めている。もとより知ったかぶりの言葉は杢太郎の嫌うところであった。こんなところに杢太郎の知的な誠実さが感じられる。

ヨーロッパについて考えるたびに，もっと早く留学すべきだった，ヨーロッパに来るのが遅すぎたとの思いがした。この思いはすでにアメリカに向かう「諏訪丸」の船上でも現れていたが，パリに着いて本格的な留学生活がはじまって，さらに痛切なものになった。

> わたくしのヨオロツパに来ることが10年遅かった故にか，此地の生活は，わたくしにはやや大儀に感ぜられます。また文化の道が甚だ多岐に亙ってゐる為めに，わたくしは

しばしば失心するほどです。そしてその孰れにも近づかないうちに，刺戟の過多の故にたやすく疲労します。それ故にまた時として故国を思ふの情に襲われます。

御送り下さった荷物のうちに，たとへば，五渡亭が木母寺暮雪の如きがあります。此の如き遍在的国土の，而も品高からざる郷土芸術が，尤も甘美に心を搏つのは何故でせうか。それは労することなくして其全幅の感情を会得することが出来るからでせう。(「巴里の宿から（与謝野様御夫婦に)」1922年6月22日・記)

ヨーロッパに来るのが10年遅かった，10年早く来たかったという嘆きは，もっと若く，世間のことを顧慮する必要のない立場で渡欧したかったという意味である。つまり大先達の鷗外のように，20代の瑞々しい感性と若々しい活力をもってヨーロッパに向き合いたかったというわけである。この思いは2ヵ月後の1922年8月10日に書かれた「巴里より」の中でも繰り返されている。そんなときに，ふと故国日本のことを思い浮かべるのである。

与謝野鉄幹・晶子夫妻からパリに送られてきた荷物の中に1枚の浮世絵版画があった。五渡亭つまり3代歌川豊国描くところの「木母寺暮雪」(江戸大川沿いにある寺の冬景色）である。はるか遠くフランスで暮らす杢太郎に，ときには日本らしい風景を思い出してもらおうと与謝野夫妻が選んだものであろう。

ところで杢太郎は浮世絵については終始否定的であった。アメリカに滞在中，ある婦人がボストン美術館で浮世絵を借り出して鑑賞している姿を見て，「今更ここでかう云ふもの」(「北米通信，ボストン」）を見る気分にはなれなかったと記している。また『日記』の1922(大正11）年8月11日の記述に「浮世絵を軽蔑する所以」とあるが，肝心な「所以」そのものは書かれていない。

ここでもまた，浮世絵は日本ではありふれたものであり，しかも品も高くない郷土芸術に過ぎないと貶(おとし)めている。ところが，浮世絵を軽蔑しているのに，その浮世絵に強く心を打たれたのも事実なのである。日本人だから苦労することなしに，「木母寺暮雪」という絵のもつ情感のすべてを会得できるからである。しかし，杢太郎は浮世絵のもつ甘美な情緒におぼれることをかたく自らに禁じた。引用を続けよう。

然しわたくしは考えます，我我の努力を要する文化的な進歩の道程はその方向にはない，もっと希臘的に，もっと復興期的に世界を見ることであると。この努力は我我にとって決して容易な，甘美なものではありません。(「巴里の宿から（与謝野様御夫婦に)」)

杢太郎は浮世絵的な世界から決別して，もっとギリシア的に，もっとルネサンス的に世界を見ることを提唱している。この一節を杢太郎が書き残した他の文章によって補足しておくと，「希臘」とあるのはギリシア・ラテン（ローマと呼ぶ場合もある）の古典のことである。

ヨーロッパの理解（さらに進んで世界を見ること）は，その起源つまりギリシア・ラテンにまで遡っておこなわなければならない。そのためにはギリシア・ラテンの古典語を修得することが不可欠だというのである。また，「復興期」とはルネサンスのことであり，これはもともとフランス語で「再生」を意味していて，かつては「文芸復興」とも訳されていた。ルネサンスとは，まずギリシア・ローマの古典の復興として始まった。杢太郎の文脈からするなら，「希臘」の後に「復興期」が来るのは理の当然であった。

X．ギリシア・ラテン的なヨーロッパ理解

ヨーロッパ理解から端を発して，もっと広く世界を見る新しい視野を得た。この発見は杢太郎にとって重大であったから，1922（大正11）年に執筆したいくつかの文章の中でその意味を繰り返し述べている。ここで三つの例をあげておこう。

> 若しその学校（大学）で我我に希臘語なり，羅甸語なりを手きびしく叩き込んでくれ，古へ人道の巨匠に導いて居てくれたなら，亜米利加の殺風景な摩天閣は勿論のこと，ルウヴル，パンテオン，マドレエンの前に立っても，そんなに自分をみじめに卑下はしなかったらう。よしんば顔が黄ろくて，身に着ける洋服が頓馬な形であったにしたところで。(「エンゲン湖畔」1922年8月4日・記)

> 支那の古代文化を研究すること無く，日本の絵画，茶道，造庭術などを論ずる西洋人があるとしても，その鑑識には我我は中中感服しません。羅甸語一つ知らないで，それで仏蘭西の文化が解ると思ったら，それこそ大それた事です。(「巴里より」1922年8月10日・記)

> わたくしの此国に来って感じた羞恥の念の最も大なるものは，顔色の黄褐で，挙止の粗野な事ではなかった。寧ろ希臘—羅甸の教養を怠って尚且泰西の文化を習得しようとした浅慮であった。しかし是は強ちわたくし一人の罪ではない。人のわたくしに施した教育法の罪である。(「ブルタアニュ」1922年8月28日・記)

はからずもこれらの文章には杢太郎の実体験が読み取れる。アメリカではニューヨークでもシカゴでも大都市ではたびたび摩天楼（スカイスクレーパー）を目にした。これはアメリカの都市文明の象徴であり，天を突く威容で外国人旅行者に圧迫感を与える。そんな摩天楼は杢太郎の目には殺風景に映ったのである。

パリでは有数の名所であるルーヴル宮，パンテオン，マドレーヌ寺院を訪れたとき，杢太

郎はみじめに卑下する自分に気がついた。なぜ自分を卑下しなければならなかったのか。現代の日本人観光客だったら，これらの記念建造物を前にして，たとえその歴史的・文化的背景についてあまり知識がなくても，自分を卑下したりはしないだろう。ひと目見て，そのモニュメントが立派であることがわかれば，ひとまずは納得するにちがいない。杢太郎はつねにヨーロッパ理解の問題をかかえていた。だからヨーロッパ文化の根底であるギリシア・ラテンの教養を欠いている自分をみじめに卑下したのである。良くも悪くも，こうした反応に杢太郎の独自性をみることができよう。

さきに引用した「エンゲン湖畔」でも触れていたが，「巴里より」でもまた中国の古代文化とそれに大きな影響を受けた日本文化について述べている。杢太郎は欧米に渡る前に，医者として中国に4年間暮らした。つまり中国の社会と文化を身をもって体験しているのである。日本の伝統文化（絵画，茶道，造庭術など）は古代中国文化に多くを負っている。だから日本文化を論ずるには中国古代文化の研究が不可欠である。フランス文化とギリシア・ラテン文化についても，それと同じことがいえるのではないか。

杢太郎は自分の顔が黄色であることを繰り返し述べている。日本にいれば周りがほとんど日本人だから気がつかないけれど，白人の社会に来ればいやおうなしに自分の顔が黄色く見える。そんな経験を踏まえての発言であろう。

XI. 断念と残された道

それでは，この新しい視野に立つべく，杢太郎は自らギリシア語とラテン語を学んだであろうか。答えは否である。それについて杢太郎の考えを知るための恰好の資料である和辻哲郎宛の書簡（1922（大正11）年11月17日付）を見てみよう。少し注釈を加えておくと，この年の7月にパリからリヨンに移り，ランジェロンという学者と共同研究（糸状菌の分類）を始めた。といってもリヨンに腰をすえて研究生活を送ったかといえば，そうではない。9月にはベルリンに行き，ここを基点としてポツダムやケルンを訪れている。10月半ばでリヨンに戻っている。また，この間に何度かパリに戻っていて，移動の多い一年であった。親友の和辻宛の手紙はリヨンから出されている。

> 里昂は気に入ったまちで景色も人気もよい。例の有名な人形芝居ギニヨオルがある。然し近頃は文学とは全く絶縁で（そのくせ医学とも絶縁で）何も御報知することがない。1年以上になるが仏蘭西語はちっとも進まないから仏蘭西文学など御話にもならない。（中略）それに仏蘭西へ来て新しい Perspective が開けた。それは羅甸（——希臘）文明だ。そして1つの文明と云ふものはかなり深く語学と結合してゐるものだと思ふから（それ故僕は漢字保存党だ）その方は門に入るまでもなく断念した。さて何が残る。結局

「黴」いぢりより外は仕方がなくなる。この方だと勉強次第で世界的水準までに達することが出来る。僕も人生の半を過ぎた。そして前途の坂道が見える。もういろんな浮気もしてはゐられまいぢゃないか。

杢太郎は自分が差し出した相手によって手紙を書き分けている。たとえば東京帝大医学部の恩師土肥慶蔵に宛てた手紙や義父の河合浩蔵宛の手紙は，句読点も省略した（手紙文ではそれが正式な書き方らしいが）候文で，難しい漢字が使われていて非常に読みにくい。しかも儀礼的な感じを覚える。妻の正子宛の手紙は口語体で書かれていて読みやすいけれど，ときたま候文になっている場合もある。これは妻との距離感が時によって変化したからであろう。

気心の知れた友人である和辻哲郎を相手にして，杢太郎は裃を脱いで本音で語っている。「近頃では文学とは全く絶縁で（そのくせ医学とも絶縁で）」とはいったいどういう意味だろうか。20代ではあれほど創作力横溢だった杢太郎も，文壇から徐々に離れていった30代になって詩・小説・戯曲といった純然たる文学作品を書くことが少なくなった。今回の留学で生まれた詩は，キューバで書き上げた「海ははるばる朦朧として女人のすがた」という総題のついた7篇の詩，パリの生活の日々に書きついだ「巴璃山歌」の総題がある11編の詩だけである。欧米滞在中には小説や戯曲をものにすることはなかった。だからかつての創作力がなくなった自分に，いくぶんか自嘲の意味もこめて文学とは絶縁だという言葉を吐いた。

それなら医学研究に専念しているかといえば，正直言って医学にも熱は入らない。いずれにせよ，文学も医学もあまりやる気がしないのである。またフランス文学を論じたい，紹介したいと思っても，自分のフランス語力ではそれもおぼつかない。どこにも自分の行くべき道のない袋小路に迷ったかのようである。

そこで杢太郎は，いままで論じてきたギリシア・ラテン文明の問題を持ち出す。しかしながら，ギリシア文明なりラテン文明なりに取り組むとしたら，ギリシア語やラテン語を修めなければならない。37歳の杢太郎は古典語を学ぶ時機を失してしまった。せっかく開けた新しいパースペクティヴ（視野）を断念せざるをえなかったのである。断念の果てに残された道は「黴」いぢり，すなわち自らの医学研究・細菌研究であった。これならば努力しだいで世界的水準にまで到達することができると杢太郎の意気は高かった。

一度は断念したパースペクティヴではあったが，帰国してから書いたエッセイ「古典復活礼賛」（『明星』1925年12月1日号掲載）にはその意味が改めて繰り返されている。「外国語習得のペルスペクチイフは拉丁（ラテン），希臘の古典の会得に達する。それまでを能くする日本人は6千万人中果たして幾何ぞや。日本人の見解と趣味とは実際日支の古典に負ふ所が多いのである。而してその闕は之を現代外国語に拠る——又願ふらくは之を古代外国語に拠る泰西文化の吸収同化を以て補ふべきである。」

外国語（西洋語）の習得は行き着くところラテン語・ギリシア語の会得になる。日本人の

見解と趣味，すなわち現代まで続いている日本文化は，日本と中国の古典に負うことが多い。その足りないところは現代外国語，いな古代外国語（ギリシア語・ラテン語）によるヨーロッパ文化の吸収同化によって補うことがよろしい。1922（大正11）年にフランスで杢太郎が得たパースペクティヴがここに蘇っている。

（続く）

注

木下杢太郎からの引用は『木下杢太郎全集』全25巻（岩波書店）および『木下杢太郎日記』全5巻に拠った。引用にあたっては新字・旧かなづかいとした。

（本論文は愛知大学研究助成 C–52を受けている。）